

マスキングテープがつなぐ病院・地域・企業—ホスピタルアートの新たなかたち—

永廣佳（特定非営利活動法人コミューナル理事）・永廣信治（特定非営利活動法人コミューナル理事長）

近年、保健医療分野では「キュア中心からケア中心へ」のパラダイムシフトが謳われ、病院内での治療に留まらない地域包括ケアの重要性がクローズアップされてきた。一方、医療現場では、DPC 制度の導入や病床数の削減政策により効率的な医療を追求する傾向が強くなり、患者の回復に寄り添う余裕が失われている。このため病院の収入に直結しないアートは、あればよいが必須ではないものとして、積極的な導入例は限られている。そこで病院側にできるだけ負担をかけずにホスピタルアートを実現する取り組みを紹介したい。

私たちはマスキングテープを使ったホスピタルアート制作を行ってきた。手が汚れず臭いもなく、簡単に手でちぎることができるマスキングテープは、幼い子どもから高齢者まで、誰でも容易に扱える素材である。壁に貼ってもきれいに剥がすことができるため、季節ごとのリニューアルにも適している。この性質を利用して、病院外の人も巻き込んだ壁画制作を複数の病院で展開してきた。

愛染橋病院（大阪市）では、病院の職員と本法人のスタッフに加え、近隣の企業の職員がボランティア活動の一環として参加し、小児科外来の待合等に季節飾りを制作した。また熊本大学病院では、企業社員、医療系学生、地域の人たち述べ 500 名以上が関わるプロジェクトを実施した。ここではアーティストの監修の下、事前のワークショップで各自が作品のパーツを作り、それらを組み合わせて病院の現場で大きな作品を制作した。

このように企業や学生、市民など病院外の多くの手を活用することにより、病院に費用や労力の負荷を強いることなく大規模なアートを実現できる。こうした病院アートは患者や職員の精神に作用するばかりでなく、制作者たちにとっても病院を応援する気持ちを伝える手段となる。このスタイルは病院の環境向上に加え、プライマリ・ケアや社会貢献のあり方にも新しい視座を提供するものである。